

## 意思決定支援の事例 ④

「意思決定」には、「意思の形成」→「意思の表明」→「意思の実行」の3つの段階があるといわれています。私たちは、日々幾多の「意思決定」を繰り返しながら生活していますが、年齢を重ねてきたときに、例え明確な認知症という症状はなくても、特定の「意思決定」をひとりで完結することが難しくなることが起こりやすくなってきます。



山口美智子さん（74歳）の例を見てみましょう。美智子さんは、教師としての仕事に邁進してきた自立した女性で、結婚の経験はありません。両親もすでに亡くなっており、兄が遠方にすんでいます。ほとんど連絡を取ることもないそうです。

美智子さんは、30年以上前にひとり住まいのためのマンションを購入していますが、後期高齢者の仲間入りをするに当たり、終の住まいについて考えるようになりました。

3つの選択肢を考えましたが、どれを選んでも自分ひとりでは完結できないということに気づいたそうです。

### （1）最期まで自宅マンションで過ごすことを目指す

在宅介護を使っても、人生の最終段階の意思決定を誰が支援してくれるのか。そもそも本当に家族がいない状況で、自宅で最期までひとりで暮らせるのかが不安。

（2）ギリギリまで自宅マンションで過ごし、困難になったら介護付き有料老人ホームへ在宅介護を使いながら、自宅マンションでの暮らしが困難になったときには、自分自身で適切な老人ホームを選ぶこともできないし、契約や引越手続きもひとりではできなくなっているはず。マンションの売却も出来ないのではないか。

### （3）早いうちから高齢者施設に入居する

自分の好みの高齢者施設を選べるメリットはあるが、早く介護付き施設に入りすぎると周囲との健康状態の違いに後悔するケース、自立型の施設に入ると最後までその施設に居られずに住み替えが必要になるケースも多いと聞く。住み替えが必要になったときには、やはり既に自分ひとりでは住み替え先の施設を選択したり、契約や手続きをしたりするのが難しくなっているはず。

このように、老後にはどこで療養・介護を受けながら生活をするかという重要な意思決定を迫られる場面が必ず訪れますが、そのときには自分自身で意思を形成し、表明し、実行するという一連の意思決定を完結することが難しくなっていることがほとんどです。

美智子さんには、OAG ライフサポートが意思決定支援をできる体制を整えておき、場面ごとのご希望をしっかりと伺っておくことで、（1）（2）又は（3）のどれを選んでも、美智子さんの尊厳を保持し、希望を実現するためのサポートが出来ることをお伝えしました。

つづく